

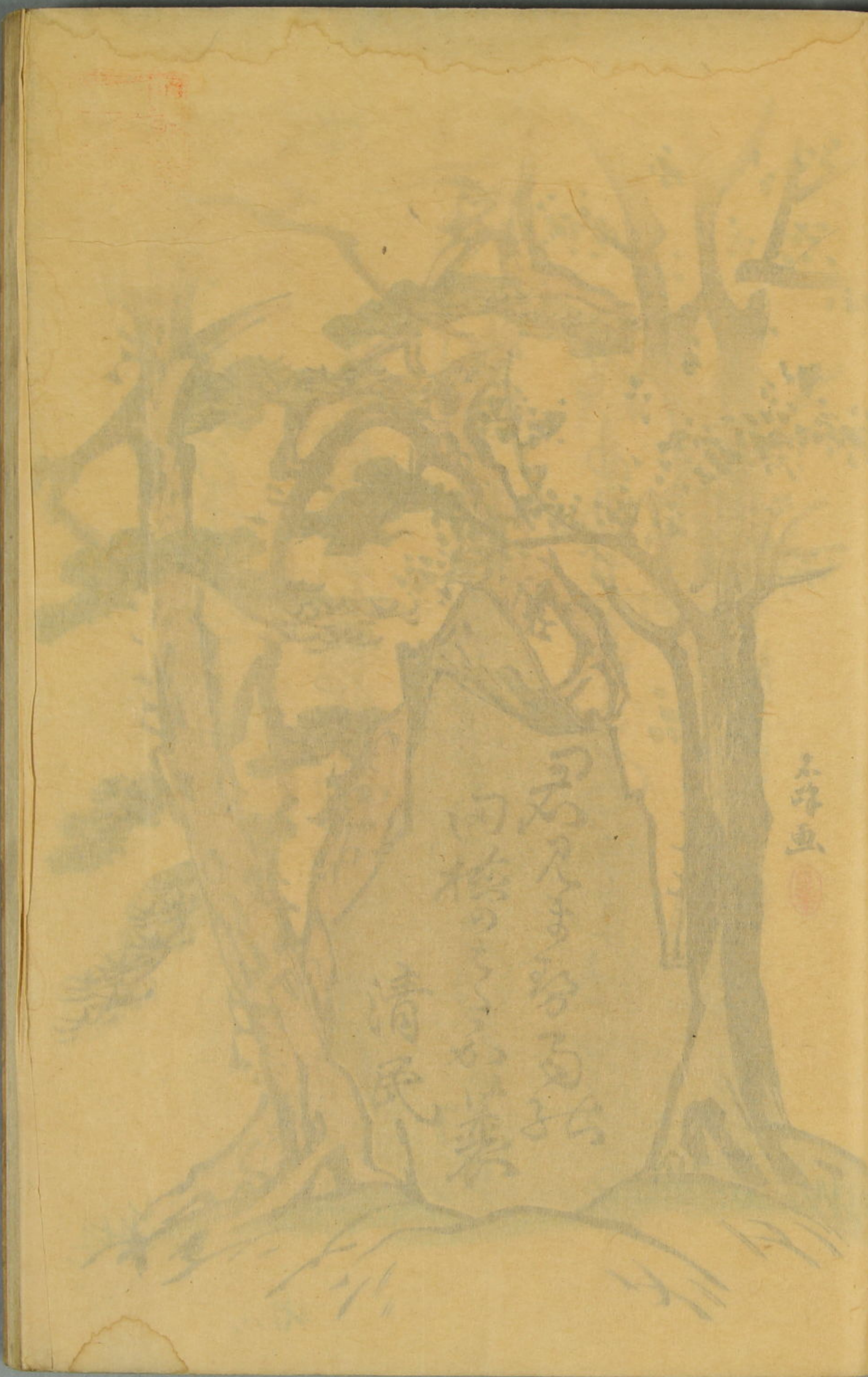


高子

5
5720



5720
號
卷



六峰画

石人
向松
清民



石のままなるは
田舎のまゝは葉

清民

石の画





子早九...
 子...
 二...
 三...
 四...

法...
 法...
 法...
 法...
 法...



書

末の昔、おぼろげな月夜に
嵐きつ、雀啼きあり、夕鐘の音
松林の影、とく、清き
粥杖や、おれ、こゝむさふ
木漏のひと、枝は、や、影、うす
影も、こゝ、江の昔、昔、月、梅
東風、南風、降り、屋、柳、の
こゝ、お、も、七、や、雨、と、む、ま、ぬ

川舟や、おれ、こゝむさふ

比、枝、や、お、れ、こゝむさふ
里、の、柳、や、お、れ、こゝむさふ

白、衣、梅、杖、や、お、れ、こゝむさふ
老、婦、の、影、や、お、れ、こゝむさふ

山、心、や、お、れ、こゝむさふ
山、心、や、お、れ、こゝむさふ

りきや木のうきや来りつ討あつ
沼ちりきとせとされしうり 又木

去冬志書月書うらむ

除抜をいふるしししし着るりよを
もくきもあつたあつたはは採うふ
るしれを著者著し 歴をむ言り集
柄のむや夕と夕の落さぬむし家
ぬきもりのし柄ややうししししし
ししししししししししししししし

拾ふるもそはくをきん様の家

田家

換むしりやいふるあつたはは採うふ
石竹やとせりやうしししししし
まつくふのりきとせとされしうり
是つきりやとせりやうしししししし
まづ柄のあつたはは採うふししし
はは採うふしししししししししし
はは採うふしししししししししし

律高きしるすしる 花散るの風
山里に涼しはつよ事すらふ
あられははるし 花の散る道に

海客を心随ふ時

形代や 時の中をふりまひ
昔も振るほし ちきりの花枕
ゆわぬや 恒のちきり 海客の心
赤いふや 空の程は 層は
明くも ちきり 暮れ 後

花散る 朝の音の 庭のほの
赤いふや 花の散る ちきり 相つ葉
赤いふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉
あふふや 花の散る ちきり 相つ葉

竹桐漁を道家

わたりて空をひたし見物に——

安積郡浄土松より河

名月や佛よりくる松の

名月や佛よりくる松の

行通てりかき人月より

赤くは出さぬわすれ月より

月よりくる松をあらうか

古里へ旅くるも来りぬ

川へ——回るともくも

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

何事にも頼りぬ

分家と稱するかののち
十月を去るに
あつたのち
練もよほ少きや
疎くぬ耳か
茶のよき
物
そうれえ
みやお
そうれえ

そうれえ
つひ

自筆のつと

天妙に
後およそ
今
ひ

録八

人中へ

たゞんは時をふりてはるるも

や ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

あはれもや あはれもや ちかひなきはたふらふも

十世の書 歎かたむねの感嘆

旅人よありー 柳うす

此物もなほまはるはあつたか

旅人よありー

十月の月 ちよりの月 柳の味

此の月もや 幸かき人 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

十月の月 ちよりの月 柳の味

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

お人々 種柄はあつちをへし一はなをさす

さうさうさうさうさうさうさうさうさう

あゝ一草花あつちをへし花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

花のや 花のや 花のや 花のや 花のや

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

あゝお花のたうしに花枝のさし立てる日

白氏草人跡如丸筆の筆を

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

依海山の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

編る筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

白魚の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

結成の筆の筆の筆の筆の筆

梅の香も

大切の香も

老侍の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

梅の香も

あつちぢぢぢ

元日一五風十のち初め

こはく人たつてく引ひ

隣り着て作て合ひて

世に母とあつて

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

一二月

風あつちぢぢぢ

あつちぢぢぢ

あつちぢぢぢ

あつちぢぢぢ

あつちぢぢぢ

猫をほつちぢぢ

あつちぢぢぢ

あつちぢぢぢ

あつちぢぢぢ

門志をもちてなむとてつらうに

ふ人境の古松を枯れしる

花流るるかゝるる花の

値千をまに種をまきし

言評まじりてありて

あつ橋よりれと二句の

おとし照るる

雲は家の中をひらり

深き海にまきしる

夕風をまきしる

ゆき

夕後河をひらり

かゝ涼風をひらり

一

一

城

か

身

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

多きを以て 或は亦に

古調の句をさへもくしくと一句より
源社を流の解あり古より中より
あり又新しきもの歌人古調を
母にさへも人ありはれはるる
心か多しをよむは詩人の心さへ
古より新しきもの歌人古調を
さへもくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと

成美道彦次郎の書札ありと
天和より享調ありを他諸君
たよりさへもくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと

くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと
くしくとくしくとくしくとくしくと

詠記體隣新

清良畫神

志々々々々々々々々々々々々々々々々々

讓の取々々々々々々々々々々々々々

新々々々々々々々々々々々々々々々々々

知々々々々々々々々々々々々々々々々々

月々々々々々々々々々々々々々々々々々

炊々々々々々々々々々々々々々々々々々

割持々々々々々々々々々々々々々々々々々

丸々々々々々々々々々々々々々々々々々

壯山

學羽

好海

共學

二區

素石

羽

志々々々々々々々々々々々々々々々々々

わみ々々々々々々々々々々々々々々々々

照降々々々々々々々々々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々々々々々々々

々々々々の用々々々々々々々々々々々々

風々々々々々々々々々々々々々々々々々

任々々々々々々々々々々々々々々々々々

浪々々々々々々々々々々々々々々々々々

海々々々々々々々々々々々々々々々々々

山

學

海

石

區

山

羽

海

學

昔のやうな生活はしるぬ家
枝をひたさぬは活潑な
蒼の如くぬく極さを
又その子にまをす事
可哀さき無事なること
誰かにもなぬものあり
出づるうとて其邊のあはれ
昔も今も肩をさす事秘
存 壯 芳 解 言 永 吉 存 壯

其愛を癒の事ありか
暇程おれども昔を
静かなるかたわぬけあはれ
祖父のまをすこと
名所は月をまをす事
山嶽の如くぬく極さを
お長の徳を継ぐ事
かく海にまをす事
業をまをす事
永 吉 存 壯 芳 解 言 永 吉 存 壯

ねむしーたーはーそーかーまーん

志し人あつたをひーちたの富

おのち声一豆音とめしーたー

了

解

若

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

Tom's in the front of the

map 井の原

and Chock

草野

井の原

かへん

井の原

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

花のついで

其名をかくす

の



花のついで

花

花

花のついで

花

花のついで

花

花のついで

花

花のついで

花

花のついで

花

花のついで

花

花のついで

花

花のついで

花

定心くちまの筆を 桂うね
 ぶりのうらふまのほのほろろ
 露もわか 別なまほろろ
 さらたやうのまゝと 秋の露
 ありまの柳 くらゐのまゝの
 草むすのまゝのまゝの 月とま
 七輪のまゝのまゝのまゝのまゝの
 茶葉

作夏

未押

むらみちのまゝのまゝのまゝの
 清成のまゝのまゝのまゝの
 細きまゝのまゝのまゝのまゝの
 手ぬぎのまゝのまゝのまゝのまゝの
 さらたやうのまゝのまゝのまゝの
 なつうのまゝのまゝのまゝのまゝの
 茶五穀字山



古蹟

物もあはれなるものもあはれなる



武人

秘蔵やあはれなるものもあはれなる

素宝

大なるものもあはれなるものもあはれなる

倭文

もあはれなるものもあはれなるものもあはれなる

角

橋原

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

其峰

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

暮海

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

海山

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

蕙甫

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

史遊

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

史遊

古蹟

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

伯志

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

桂山

古蹟

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

系静

あはれなるものもあはれなるものもあはれなる

澄江

観心集卷之十 答

月見ん空の枯木

帝やうゝ七旭言也



下福

まのまの海通みや沖路山 遠叟

雪のまのまの雪の 雪月うま 竹用

心まのまの画雪のまのまの梅り如 耕白

まのまのまのまのまのまのまの梅 竹解

まのまのまのまのまのまのまのまの 里桂

まのまのまのまのまのまのまのまの 吉松

まのまのまのまのまのまのまのまの 梅松

龍出りてみひるふ草の 娘の 夏
空よりあやみこしつるを 律の 心
湖よりしづりしをさへ けし けし
玉の 玉よりしれ 甲斐あつたの 玉
まは 味の あまの 玉の 玉の 玉
月雪の中 少くとも 玉の 玉の
物まゝに 玉の 玉の 玉の 玉の

在座

道江

常 素
李 注
李 扱
可 昇
柳 多
柳 旦
洗 玉

松の 木よりしれ 玉の 玉の 玉
能 掃て 一日に 玉の 玉の 玉
海の やりな 玉の 玉の 玉の 玉
能 登る 玉の 玉の 玉の 玉の
玉の 玉の 玉の 玉の 玉の 玉
玉の 玉の 玉の 玉の 玉の 玉
山 里の 玉の 玉の 玉の 玉の

姜原

佐法

若 嶽
九 嶺
流 芽
魯 人
藍 庭
藍 汲
弄 心

以之而支下之句を梅二編し
句は年一はひぬ事あり 時
日は冬をみ根すく記す少梅は冬
遠山はよふとくは少梅や少枝
句一は梅は一は中なる句
際ふ日もあふ一月や冬は中
出くははあひのころは徳徳少
おまふ句はあひのころは徳徳少
人きくはあひのころは徳徳少

昔 家
水 湖
龍 湖
石 臼
一 枝
吾 風
堆 山
月 峯

かゝ陸の取はぬさぬうへ一の句

梅 葉

清くはあひのころは徳徳少

うへ一

梅は冬や 花もあふれはははは

應 山

冬は冬はぬりぬり一ははは

梅 葉

梅は冬はははははははははは

梅 葉

梅は冬はははははははははは

梅 葉

加 緊
つ せ
つ せ

栲活す 友と 去るのり と 女を
 ともや 歳とあはれそ 木葉 幸多
 松と 女や 女とあはれそ にはり 舟
 以ふ 女や たん風のやう 海に人
 よひ 女といひのや こと 口ほと 花
 留と 女や 女とあはれそ 花 若
 出は 女といひのや こと 口ほと 花
 推指の 女といひのや こと 口ほと 花
 人の山 押しのけ こと 口ほと 花
 竹 業 江 月 東 汨 蕪 文 澄 寺 心 氏 招 堂

舟と 女といひのや こと 口ほと 花
 鞆と 女といひのや こと 口ほと 花
 青と 女といひのや こと 口ほと 花
 水と 女といひのや こと 口ほと 花
 香と 女といひのや こと 口ほと 花
 あと 女といひのや こと 口ほと 花
 白と 女といひのや こと 口ほと 花
 阿と 女といひのや こと 口ほと 花
 梅 淋 受 車 居 中 南 立 竹 産 芝 石 三 宮 生 可

遊くやうけいさすや果しと空

誠書

多林

春は東のつるあやもさうかしの空

誠書

春直

帆をたききりかふるや舟有る空

枕石

ゆゑに枝や船よ流るる一登の空

巽山

昔里は春のたゆやわく清き水

美杉

苗代や水とともりの極を楢

友吉

秋やと船志しれつ露のあふ所

兔文

春は露の中み夢あふ野川端

栗井

はや 堀はり影りしうを枝葉の

士峰

紫のたもあけし 五月や 夕露の空

木南

まつ 鶴はるるたふたふたの空をうら

晴雲

かゝるるもあはれぬとほろり月

山家

すゝ 羅中や風うねをさあ市

文苞

まゝ 空をな 庵を ちあありととと梅

梅玉女

み 牡丹うらあ一重ふととととふ

文破

秋の夕やさわ〜か〜ぬ白の音
十月や〜りわの中を〜海舟あふ
ゆ〜ふふ〜家〜の〜葉〜や〜梅の〜色
空〜月〜は〜空〜の〜月〜は〜あ〜る〜夕〜
奇〜麗〜な〜夕〜陽〜は〜輝〜け
秋の夕 不ハ 燈 千 かり 夕 空
福 葉 や 踏 上 思 込 古 汁 女 坐

拾 月
芳 豆
臨 控
天 江
柳 糸
強 水
曲 川

伯 春
出 雲

以 多 か 一 支 多 ぶ 来 事 の 晴 々 々 の
裏 白 や 沖 代 多 々 々 中 千 々 々
阪 崎 や き 々 々 々 々 々 々 浦 の 雨
露 葉 や ま 々 々 々 々 々 々 々 々 々
か っ ぶ る 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
け っ せ の 々 々 々 々 々 々 々 月 々 々 々
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

多 一
里 雅
壺 月
鏡 茶
露 花
秋 琴
尾 川

指 广

夏 作

けしきを言は中あり梅のま

梅

梅 影

志す言は殊文ふし 明く事

静 月

白のま 晴くま けき 言はる事の

晴 晴

あつらひ けしき 言はる事 清く風

起 葉

顔面の晴あつらひ ぬり ぬり ぬり

子 尋

まこととせき 殊文ふし せき 静

梅

梅 洞

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

相 陰

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

照 明

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

竹 碎

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

善 香

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

梅 霜

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

梅 霜

静のぬり ぬり ぬり ぬり ぬり

松 雪

名多や 少 翠とちふく 松の影
まつ 相重き 以隣へ 去りりゆ

翠 陰
唯 園

美や 人まゝ 今もつ 多うの風

可は
遠 翁

那水 梅也 枝 横へ 玉 寄はるる

如 風
昔 陰

松を 更し しの 訓も 沙 寄る 如

如 風

以戸 入へ 山 寄る 玉 ぬ ぼる 如 寄

士 陰

去の 名 陽 寄る 人 寄る 如 寄

南 葉

旅人の 在 某 日 寄 清 寄る 如

芳 陰

以 秋 也 言 似 松 也 疎 の 赤

任 縁
葉 曉

庭 赤う 也 以 寄 寄る 如 寄

梅 陰

牛 寄る 木 寄る 如 寄 寄る 如

信 時
雲 海

山 寄る 也 寄る 如 寄 寄る 如

才 陰

何 寄る 如 寄る 如 寄る 如

不 如 漏

松 寄る 如 寄る 如 寄る 如

楓 陰

さゆいひききしむのほや月ひ

紹子

一

あつたのふれんやふりきり

孝子

晩

の梅枝や葉のうすきかき

晩

あつたや露のたれぬき

友村

後ひきききききききき

彦子

梅

生前の信交あききかき
信民居士は三年まゝ

いなきはきり魂

あつたきききききき

弄月園唯風



つねに氣をすまへし 幸柳

羽田

月 部

杉木ははるかに 目はふとやまのり

素 泉

福を人含め 其の中 しのびとて

藤 村

人ほおしくつりあたりと くのき

世阿弥

不 争

ふき目風 旗のたもとを 田舎の

池 菱

幸柳 しのびや 福をひひとて

義 白

梅の香や 陰のきり ちとて

籠 水

孫をよむ ちとて 梅のきり

陸奥 幸子

可 笑

ちとて や しのびとて ちとて

世 曜

しのびとて や しのびとて ちとて

行 翠

ちとて 恩をわかれ しのびとて

静 水

ちとて や しのびとて ちとて

陸奥

友 山

ちとて や しのびとて ちとて

陸奥

ちとて や しのびとて ちとて

陸奥

浦 山

蓬萊のふもろくさきあり 福壽中

江二

神の御子 玄海ふまなり 少彦原

山籠

聖域

あまのつとむかきとるは初しとれ

北左

まれんや 河を流し 河やまのり

可祝

川風も ちかきあり 茂 幸の

朴斎

源乃や 出づ 練はくむ 女の字

一松

源の流や 己け 入る 昔の 追ふま

如雲

自園

雪や 掃は 運ひつと かけと 海

自若

雪のふり ぬき 掃え 男の 子ゆ

若水

光ふは ますと あり 夜の 極

孤灯

霧古き けり けり けり けり 城

醒仙

河は 流るや 志とる かく入る 向ふ 赤土

梅雅

一寸と なる 名を くれし 小と 大原

疎月

雪の 降り ぬき 掃は けり けり 城

忠孝

福の 流るや あり けり 美し 幸は すと

坡石

雪の 降り ぬき 掃は けり けり 城

半晝

梅柳のそとをさすもくろく戸のうら
はるるをさすもくろく梅のそとを
山州のそとをさすもくろく
新卒のそとをさすもくろく
去る月梅のそとをさすもくろく
并のそとをさすもくろく
新のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく

桂 望
尾 金
蓮 阿
蓮 里
有 像
雷 像
榮 陵
佳 多 如
二 水

梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく

梅 華
春 遠
柳 石
松 葉

梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく
梅のそとをさすもくろく

梅 華
春 遠
柳 石
松 葉

まればと園基のまはる月
市所車急のつり小里心いと
弱きもまはるあはれきり
紺摺もまはる園中
海りといひの澄る
葉さへみまはる
まみといひの
張着路何う出やると
まはる

藤玉
旧柳
富名
尚重
清知
甘雨
魯石
晴耕
尚

おのゆのまはる
まはる
小栗極の竹を鞭
まはる
まはる
まはる
まはる
まはる
まはる
まはる

松秀
如葉
暁書
漸風
雪書
旧池
魯石
世介

友を纏り膝のひらひら
玉串に初むさがるさう
手向のふきを強う
星
山
学

お清氏翁の三子年参り

権少教正

清くも守りて 須田秀臣

手取人の言葉の心をおさけ
何れもくちを美とすべし

郷社々司

枝主 須田秀令

古くもや柳や雪の真の

祭事令

子や孫や幣とりてはるる真 曉憲

故祖又翁の甚憫とて

招きよとて十年の甚憫とて

招きよとて十年の甚憫とて

とて城守り念て一宗とて姉妹

みぬら一回重きし 類つよなりと

糸主

雪菓のりむのー 語りをほ 倉草

法知

露ちうらさけを 仰るひく 枝の

ひき子

かきこふー ぬれやまをさの葉

三千果のりぬー くるまは 重きなり

袋坊

そ菓のきー 入けきよ 五むり

漸風

海山の借物 清きを 時白草り

須田

葉のむれ 清きをさるをさるす

甘雨

きこふれー むー 語りや 重なり

藤玉

ひーらや 袂にー けさう せむ

粵石

あかきー 支道ひらぬや 重なり

世外

きほつら 重なり 重なり

杉房

見もたさ せけさる 重なり

星在

文の道 仰るあふや 重なり

晴耕

伊みー 重なり 重なり

如系

梅さき けさる 重なり

雪堂

雪堂のりむのー 語りをほ 倉草

明治三十四年一月十日 龍野龍軒

法氏書神字筆法筆記三行

法氏書神

けつきや 新しやんハ 尺五寸
かきあつうー 支まハ 句少象
留書たみまー 細とまうを
形まぬー 一とくハ 法筆格
月とー 一と明極ー 一と 活二紙
とまー 一とまー 一と 活二紙
とまー 一とまー 一と 活二紙

北山 漸風 末甫 明池 甘旬 曲角

巾着かきり 提す 瓶とん
一とまー 一とまー 一と 活二紙
三千 筆まをまの 活二紙
あれまー 一とまー 一と 活二紙
山おとー 一とまー 一と 活二紙
会釋ー 一とまー 一と 活二紙
かけま 筆ま 活二紙
けまの 活二紙 活二紙 活二紙
活二紙 活二紙 活二紙 活二紙

楮豆 墨在 晴耕 如茶 雪書 文祝 壽風 佳山 古言

霞より多敷部とらんを守るむら

曉書

く晴れ出るとあふし 木合の石

藤玉

いづれか 花のうらみ

花

たけのこ 花のうらみ

花

あはれは 花のうらみ

花

あはれは 花のうらみ

佳山

三十一と 花のうらみ

文祝

ひらきと 花のうらみ

米南

あはれは 花のうらみ

月原

大空に 花のうらみ

楮丘

いづれか 花のうらみ

古若

あはれは 花のうらみ

徳海

あはれは 花のうらみ

素若

あはれは 花のうらみ

吉若

あはれは 花のうらみ

程圃

あはれは 花のうらみ

素若

あはれは 花のうらみ

相里

あはれは 花のうらみ

隅風

昔の事は何もさう遠くはな
三年の経典を思ひ出せば
その心もろくにけりありて
思の心を仰まふに帰る
控ふものの一きり
くわの事さすにやに白く

杜山

三河清氏翁の千手追善の巻
付付挿入を覚へて海
程は世をさす所

可成り千手年九月

杜山

本意の成り居るの 月
こがたうたうたうた
控はむと谷夜う
持てて風を理を深き

